

第 324 回日本泌尿器科学会岡山地方会演題抄録

日 時 2020 年 9 月 19 日

オンライン開催

みやびウロギネクリニックにおける性感染症 (STI) の検討
(2015 ~ 2019 年)

井上 雅 (みやびウロギネクリニック)

【目的】近年、梅毒の増加や、耐性菌の増加などが指摘されている。そこで今回、2015 年から 2019 年までの女性の STI の状況を調査し検討した。【対象と方法】2015 年から 2019 年の間に当院に STI 疑いで受診した女性患者を対象に後ろ向きに検討した。【結果】2015 年から 2019 年における膣分泌物の淋菌陽性総数は 16 人 (検査総数の 1.4%)、クラミジア陽性数は 157 人 (13.4%)、淋菌クラミジア陽性数 12 人 (0.8%) であった。年毎の陽性率には変化は認めなかった。淋菌クラミジアの咽頭検査では淋菌陽性 5 人で、クラミジア陽性者はいなかった。トリコモナス陽性数は 34 人で年毎の陽性率に変化はなかった。梅毒は 2018 年に 1 人、2019 年に 1 人であった。いずれも無症状でパートナーの感染が判明したことによる受診であった。当院でのクラミジア感染治療薬の第 1 選択は AZM 1 g 単回投与であるが、クラミジア治療後の再診率は 72.5% で、27.5% は未受診であった。再診した人の 76.9% は治癒していたが、23.1% は再陽性 (非治癒) となった。再陽性率は年々増加傾向にあった。【考察】淋菌、クラミジア、トリコモナスの陽性率は特に増加傾向は認めなかった。約 3 割は治癒判定できていなかった。また、AZM に耐性のあるクラミジアは増加傾向であった。今後、AZM をクラミジアに対する第 1 選択薬に使用するべきかどうか検討が必要である。

入院時の梅毒検査がきっかけで発見された梅毒症例について—当院における術前梅毒検査の現状—

杉野謙司・那須良次 (岡山ろうさい病院)

矢野朋文 (同・内科・感染管理委員会)

【緒言】観血的な医療行為を前提とした入院時検査として、肝炎 (B、C) ならびに梅毒検査が慣習的に行われている。今回入院時検査がきっかけで発見された梅毒症例と当院における術前梅毒検査の現状を報告する。【対象】2014 年 1 月から 2019 年 12 月までの間に入院時検査として梅毒血清検査を行った延べ 24,212 名 (男性 12,185 名、女性 12,027 名、平均年齢 67 歳)。当院では特異的梅毒抗体検査である TPLA (*Treponema Pallidum* latex agglutination) を採用しており、0.5 COI 以上を陽性と判定している。【結果】TPLA 陽性は延べ 350 名、全体の陽性率は 1.45% であった。男性 1.37%、女性 1.52%、年齢別には 49 歳以下 0.53%、50 ~ 74 歳 1.06%、75 歳以上 2.16% であった。経年的に陽性率を見ると、2014 年 1.43%、2015 年 1.49%、2016 年 1.55%、2017 年 1.57%、2018 年 1.43%、2019 年 0.95% であった。診療科別では泌尿器科 1.44%、外科 1.28%、内科 1.71%、整形外科 1.40%、脳外科 1.47% などであった。入院時検査がきっかけで発見された梅毒症例は 2017 年 1 例 (42 歳、男性、再発性咽頭乳頭腫)、2018 年 3 例 (23 歳、女性、虫垂炎、49 歳、男性、胸膜炎、45 歳、男性、右足関節骨折)、2019 年 2 例 (44 歳、男性、右脛骨骨折、72 歳、女性、左人工関節置換術) の計 6 例であつ

た。【結語】2017 年以降、入院時検査がきっかけで発見される梅毒症例が散見されるようになってきた。特に若い年代での陽性例は注意が必要である。

当院における梅毒治療の現状—初診時検査陰性例を中心に—

横山光彦 (よこやま腎泌尿器科クリニック)

【はじめに】ここ数年梅毒患者の増加が指摘されている。しかしながら典型的な皮膚症状や血清反応を示さない症例もあり、診断に苦慮する場合も多い。初診時検査陰性例を中心に、当院で経験した梅毒患者を供覧する。【対象と方法】2015 年 5 月 1 日から 2020 年 8 月 31 日までの間に当院を受診し、梅毒と診断し治療した患者 85 例を検討した。梅毒血清反応はカルジオリピンを抗原とする非特異的な RPR カード法 (メディエース RPR™) と T.p. (*Treponema pallidum subspecies pallidum*) を抗原とする特異的な TPHA 法 (メディエース TPLA™) を用いて診断した。【結果】男性 81 例、女性 4 例、年齢: 18 歳 ~ 78 歳 (中央値 35 歳)、無症候性梅毒 12 例、顕性梅毒 73 例、第 1 期 55 例、第 2 期 18 例、初診時 RPR、TPHA ともに陰性 7 例、RPR 陰性、TPHA 陽性が 11 例、RPR 陽性、TPHA 陰性が 1 例であった。治療は全例アモキシシリン 1,500 mg/day を投与した。投与後に再診がなかった患者が 12 例あった。【まとめ】梅毒患者の局所所見は多彩であり、受診時梅毒血清反応が陽性にならない症例も 2 割程度存在するため十分な説明が必要である。

当クリニックにおける梅毒患者の臨床的検討

常 義政 (じょう泌尿器科クリニック)

【目的】近年、梅毒患者は全国的に患者数が急増していることから特に注目されている性感染症である。今回、当クリニックにおける梅毒診療状況および臨床的検討について報告する。【対象】2015 年 9 月から 2020 年 9 月までの間に当クリニックを受診し、新規に梅毒と診断され治療を行った 47 名を対象とした。【結果】性別は男性 39 名、女性 8 名 (デリヘル嬢 2 名、一般女性 6 名) であった。感染経路はデリヘルが 20 名と半数以上を占めており、パートナー 13 名、出会い系 5 名、ピンサロ 5 名、同性愛者 3 名、自覚なし 1 名の順に多かった。病期による分類では早期梅毒第 1 期が 32 名と最も多く、早期梅毒第 2 期が 9 名、後期梅毒が 6 名 (無症状 5 名、眼症状 1 名) であった。全例に経口合成ペニシリン剤 (アモキシシリン 1,500 mg/day) を 4 ~ 8 週間で治療を行った。【結語】梅毒の診断は時期や症例により症状も検査値も多様であり、診断に難渋することもあり見落としの危険もある。また、治療経過も多様なため総合的な判断が必要とされる。梅毒患者は増加傾向にあり、日常診療の際には常に念頭に置かなければならない疾患であると考えられた。

あらき腎・泌尿器科クリニックにおける男性尿道炎の患者背景と治療成績

門田晃一・荒木 徹 (あらき腎・泌尿器科クリニック)

当院で2017年1月から2020年6月までの間に診療した男性尿道炎289例の患者背景と治療成績を検討した。尿道炎の内訳は淋菌性62例(21.5%)、淋菌クラミジア性21例(7.3%)、クラミジア性99例(34.3%)、非淋菌性非クラミジア性107例(37.0%)であった。年齢は17～72歳で、年代別では20歳台が37.7%と最も多かった。感染源はCSWが51.6%と過半数を占め、この傾向は淋菌性、非淋菌性で大差はなかった。潜伏期間は淋菌性では1週間未満が54.9%と過半数を占め、非淋菌性では1週間未満が18.9%、1～2週間未満が20.4%、2～4週間が16.0%であった。治療成績については再受診した161例(55.7%)について解析した。淋菌の薬剤別除菌率はCTR1 1g単回・100%、AZM 1,000 mg単回・30.4%、AZM 2,000 mg単回・100%であった。クラミジアの除菌率はAZM 1,000 mg単回・78.0%、AZM 2,000 mg単回・85.7%、LVFX 500 mg 7日間・66.7%であった。また、自覚症状と尿所見から判断した非淋菌非クラミジア性の薬剤別有効率はAZM 1,000 mg単回・67.3%、AZM 2,000 mg単回・100%、LVFX 500 mg 7日間・87.5%であった。これらの結果を踏まえて、より適正な男性尿道炎治療指針を考察したい。

男性不妊患者でのクラミジア感染の臨床的検討

井口裕樹（いぐち腎泌尿器科クリニック）

【緒言】クラミジア感染は、女性の卵管性不妊の最大の原因であり、女性不妊患者では検査が必須である。しかし、男性不妊患者でのクラミジア感染はほとんど評価されていない。【目的】男性不妊患者のクラミジア感染を評価する。【対象と方法】当院を受診した精液所見に異常を認める男性不妊患者で、初尿による尿中クラミジア遺伝子検査（PCR法およびTMA法）を行った226名を対象とし、臨床的検討を行った。【結果】226名中クラミジア陽性者は17名(7.5%)であった。陽性17名中、排尿時に6名、射精時4名に

自覚症状を認めた（重複あり）が、9名は自覚症状を認めなかった。尿沈渣では陽性17名中6名、精液検査では3名に検体中に白血球を認めた。陽性17名中7名でクラミジア感染の既往があった。また、クラミジア陽性とされたパートナー女性をもつ患者22名中7名(31.8%)が陽性であった。【考察】男性不妊患者は、クラミジア感染率が一般より高い可能性が考えられる。自覚症状や遺伝子検査以外の検査では、クラミジア感染は除外できない。【結論】男性不妊患者でも、クラミジア感染に留意すべきである。

男性尿道炎の問題点—開業後に見えてきたもの—

横山光彦（よこやま腎泌尿器科クリニック）

【はじめに】市中の泌尿器科クリニックには、好むと好まざるに関わらずそれなりの男性尿道炎患者の受診がある。当院における男性尿道炎の現状と問題点を報告する。【対象と方法】2019年1月から2020年6月30日までの間に当院を受診し、性交後に尿道炎が疑われ、尿中クラミジア、淋菌核酸増幅法検査を提出した延べ640名の男性患者を後方視的に検討した。初尿を採取し、real-time PCR法コバス4800（ロシュ）を用いた。【結果】年齢は16歳～71歳（中央値30歳）、当院初診516名、2回目以上124名、STIの既往あり234名であった。クラミジア陽性は316名(49%)、淋菌陽性は118名(18%)、淋菌クラミジア合併症例は62名(10%)、非クラミジア性非淋菌性尿道炎は144名(23%)であった。クラミジア陽性患者の55%に治癒確認を行い、その内13%が再度陽性となり追加治療を行った。非クラミジア性非淋菌性尿道炎で明らかなウイルス性尿道炎を除いた120名中、再診があった87名のうち36名に症状が残存し追加治療を行った。【まとめ】当院の男性尿道炎患者はクラミジア性が49%と最多で、再診率は55%程度と低く、治療失敗例も13%に認めた。非クラミジア性非淋菌性尿道炎では初回治療失敗例が30%と高率であった。